

# 東京佼成W.O.の新しい顔に 世界的クラリネットイスト…

## ポール・メイエ就任披露

写真提供：佼成出版社

ステージの誰もが笑顔で拍手を送る左の写真からも、東京佼成ウインドオーケストラ首席指揮者就任を飾るデビューコンサートが成功裡に終わった様子が伝わってくる。笑顔で客席を向いているのはポール・メイエ (Paul Meyer)。クラリネットの世界的なソロイストが、いよいよ日本で本格的な指揮活動をスタートさせた。

長く薫陶を受けたフレデリック・フエネル (1914~2004) を桂冠指揮者に戴く東京佼成ウインドオーケストラは、2000年からダグラス・ボストックを常任指揮者に迎え、さらにこの

2010年からポール・メイエを首席指揮者に加えた (ボストックは06年から首席客演指揮者として在任)。

「1シーズンに最低1回定期を振っていたこととし、今年は12月の定期も指揮していただく予定です」と同団事務局はこの新しいポストを説明する。

20才から指揮活動を始め、フランス国立放送フィルなどヨーロッパ各地のオーケストラを指揮するほか、07年から韓国・ソウルフィルの首席准指揮者、08年には東京フィルの定期も指揮

したメイエと佼成W.O.との関わりは、2006年に遡る。この年に行われた第1回東京佼成ウインドオーケストラ作曲コンクールの本選を指揮し、団員の評価が高まった。

「氏の音楽性はもちろんですが、何より新曲ばかりの難しい現代曲をきちんと理解し、変拍子など的確に指揮したソルフェージュ能力の高さに誰も

が感銘を受けました。とくに木管セクションから強力なプッシュがあり、今回の首席指揮者就任につながりました」(前出)

メイエ本人もこのときの同団の印象を、「リハール前に各団員がきちんと準備して練習に臨んでいる。準備が完璧でとても良いオーケストラ」と激賞している。

2月19日に東京芸術劇場で行われた今回の演奏会は第104回定期。楽団創立50周年と重なったこともあり、「管楽合奏の原点を見つめ直す」ことをテーマにプログラムは双方が話し合っただけという。曲はモーツァルトのセレナード第10番「グランバルティータ」、ヒンデミットの交響曲変調(吹奏楽のオリジナル曲)、リヒャルト・シュトラウス(ハインズレー編曲)の交響詩「ティル・オイレンシュペーゲル」の愉快ないたずら。モーツァルトとリヒャルト・シュトラウスはメイエからの提案、それに氏にとっては未知のレパートリーという大作曲家の吹奏楽作品を楽団側が複数提示し、ヒン



1955年フランスのアルガス生まれ。クラリネットでは押しも押されぬ世界の第一人者だ。写真提供：佼成出版社



ティル・オイレンシュペーゲルを演奏後、聴衆と団員双方から拍手を受けるポール・メイエ。写真提供：佼成出版社



コンサートマスターの須川展也氏と。写真提供：佼成出版社

デミットに決まったという。コンサートでは1曲ごとにメイエが解説を加え、形式張らずに聴衆とのコミュニケーションを取ろうとする姿勢が感じられた(燕尾服を着なかつたのも同じ理由?)。

メイエの指揮ぶりについて同団クラリネットの小倉清澄さんは次のように語る。「音符を大事に丁寧に練習を進め、演奏家としての直感をダイレクトに伝えます。8分音符一つの表情にかなりの時間を費やすこともあり、色の変化を大胆に求めてくるのもクラリネット奏者らしいですね。

音量は極端なほど控え目で、とにかく色と質にこだわった練習です。そして佼成ウインドからこれまでになく澄み切った垢抜けたサウンドを引き出し、てくれました。

氏の吹くクラリネットはテンポ速め、音量大きめのイメージがありましたが、温かく気さくな人柄に直に触れてみて、その演奏の根底が見えてきました。おそらく氏にとっては凡人では速くて困難なパッセージでもテクニクと気持ちに余裕があるのでしょう。メイエ氏の演奏がさらに魅力的に思えてきました。

次の演奏会では私たちにまた新しい何かを持ってきてくれそうです」とともに大いに期待したい。